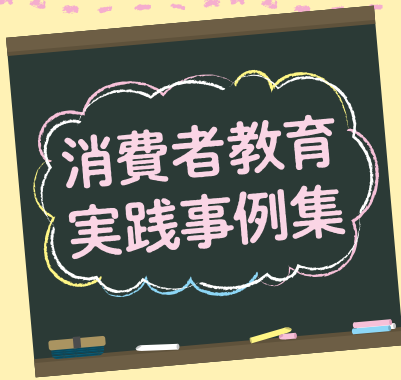


## カードゲームで考える 空き家問題

山城 京子 Yamashiro Keiko 一般社団法人住教育推進機構 福岡支部長  
2015年よりSDGsを基盤とした住育学校を開講。住教育インストラクターとして「空き家にしない家の持ち方講座」など消費者へ住教育を推進している



住教育推進機構では、国が推進する住生活基本計画(全国計画)に基づき、以下のようなビジョンを持って住教育に取り組んでいます。

1. 若年・子育て世帯や高齢者が安心して暮らすことができる住生活の実現
2. 空き家の利活用を促進し、住宅ストック活用型の市場へ
3. 住生活を支え、強い経済を実現する担い手としての住生活産業を活性化

特に近年、住まいの重要課題である「空き家」については、全国の自治体と連携し、地域全体で問題に向き合い、空き家の発生抑制・利活用の促進をめざすため、地域住民を対象として開催する空き家セミナー等で「住教育カードゲーム」(以下、ゲーム)を活用する取り組みを行っています。

### 住教育インストラクターが進行役に

ゲームは、参加者が5～6名ずつのグループになり、カードに記された空き家に関する質問に答えるごく簡単なものです。参加者は、既に空き家を所有している人、将来、実家や今住んでいる家が空き家になるという“空き家予備軍”、また地域の空き家が気になる人などさまざまです。カードには、すぐに答えられる質問(黄)、選択式の質問(青)、じっくり考えを話す質問(赤)が色分けして用意されています。参加者が選んだ1枚のカードの質問に、まずはその参加者に答えてもらい、グループ内で別の考えの人はいないか呼び掛けて答えてもらうなど、その場に応じて話の幅を広げます。例えば、「老後も今の家に住み続ける？」という質問では、

「車が無いと不便な場所なので高齢になったら病院や役場が近い所へ移ることも考えるが、そうすると家は空き家になってしまう」と答える人がいる一方、「うちは3世代で住んでいるから免許を返納しても家で生活は続けられる」と話す人、「子どもたちが帰って来やすいようにリフォームをしたり、今のうちから話をし始めないといけない」と考えつく人などグループ内でも多様な答えが出ます。

このように、ゲームの特徴は、お互いの意見を議論や討論するのではなく、質問に対しておのおのの考えを述べるため相手を知り、経験や悩みを共有して気づきを得られることです。

ゲームは、下記の基本ルールに従いながら当機構認定の住教育インストラクターが進行します。

### 【基本ルール】

- **正解はない**…正解を答えられることが重要なのではなく、自分の考えを持ち、それを説明できることが大切です。
- **閉じない**…回答すれば終わりではなく、その回答のさまざまな側面を検討し、開かれた思考を作ることが大切です。
- **異論を尊ぶ**…どんな意見でも他者の考えを尊重し、そこから学ぼうとする姿勢が大切です。

単純に意見交換を活発にさせるだけでなく、空き家問題で知っておくべき知識や情報を伝えながら、参加者の抱える課題を解決に導くことがこのゲームの要です。そうすることで、多世代で楽しみながら暮らしや住まいについて幅広く“学びを得る機会”となります。

## 参加することで効果を実感

参加者からは次のような感想が寄せられます。

- 時間が足りないと思ったほど楽しかった。
- グループに男性、女性、さまざまな年代をそれぞれ混ぜたほうが気づきが多いと思った。
- カードが1巡しか回らなかったのは驚いた。

皆さんが思う以上に毎回話は弾み、たくさんの意見が飛び交い、1～2時間はあっという間です。それは、皆が共通して持つ住まいの話だからです。ゲームに参加することで学びの効果を実感できます。

## 住教育は、未来を見据えたまちづくり

考えてみますと“暮らす”“住まう”という行為は誰にもあるものですが、私たちは日々意識をして“住まう”行動を取るのはまれなくらいで、「何げなく当たり前」に過ぎていたりするものです。ゲームで質問への答えを考えることで自身が持つ住まいに対する価値観に改めて気づき、さらにそれを口にするすることで、主体的に“住まう”ことへ意識を持つ実感が生まれます。またパートナーや他者の考えを聞くことで親睦を深め、視野を広げることができるのです。

空き家問題を基点に地域で話し、問題意識を共有したり、それぞれの意思を知って尊重し協力し合ったりすることは、地域コミュニティの形成につながり、住民意識の醸成・底上げから未来の子どもたちのための地域社会を作り上げていくことにもなり得るのです。

## 皆、住まい手であるからこそ

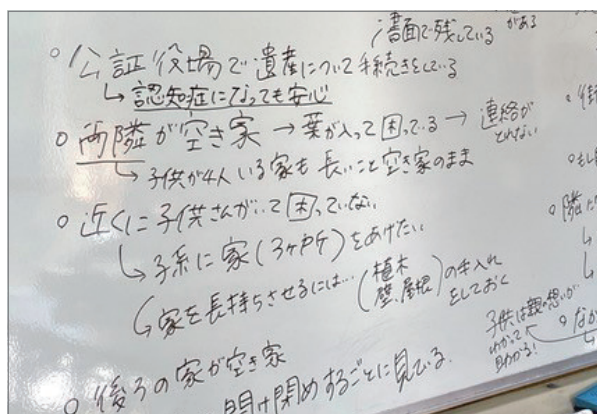
空き家セミナーでは、まずインストラクターが空き家の基礎知識などを講話し、参加者に自分の考えを持ってもらうようにしています。その次の段階でゲームを行うことで自身の課題に他者の考えが入り、選択肢が広がっているように感じます。

そして、インストラクターもセミナーを進めるうえでは、同じ住まい手の一人としての立場

写真1 ゲームのようす



写真2 ゲームで出された意見の一部



から話をしています。このことで参加者と共感し合い、寄り添った話し合いができると考えています。また「空き家」というと、不安や心配事などマイナスなイメージを持たれがちですので、視点を変えることも提案します。空き家の“問題”を“課題”に変え、地域で協力して乗り越えられる前向きな取り組みとなるよう話すと、より関心を持って参加してもらえます。

## 課題とこれからの取り組み

空き家セミナーもゲームも認知度がまだまだ低いのが現状であり課題です。自治体と連携して地域住民に届く発信や自治体職員に対する勉強会等も開催し、より空き家問題解決への実感が得られる機会を増やしていけたらと思います。

また、空き家の発生抑制等、豊かな住生活の実現に向けて住教育の推進が必要とされる今、地域で活躍できる住教育インストラクターの育成にも努めていきたいと思っています。